様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 13 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２０１１６
研究課題名（和文）　9.11 同時多発テロ以降のイギリス小説

研究課題名（英文）　Post-9/11 British Fiction

研究代表者
板倉　厳一郎（ITAKURA GEN'ICHIRO）
中京大学・国際教養学部・准教授
研究者番号：20340177

研究成果の概要（和文）：
9.11 以降のテロを扱ったイギリス小説において、2 つの傾向が見られることが明らかになった。西洋的な近代性への回帰と新左翼的価値観に対する幻滅である。西洋的理性の正当化に基づく 9.11 の神話化はもともと新左翼的リベラリズムへの失望から生まれたものだ。これがハーバーマスとデリダのテロ論と好対照をなしているのも興味深い。議論としては西洋的な近代性に対する信頼を示すハーバーマスより洗練された議論を展開するデリダに分があるように見えるが、9.11 以降のイギリス小説では前者に近い傾向が見られる。

研究成果の概要（英文）：
In this project, I detected two trends in post-9/11 British fiction: return to the belief in Western modernity and disillusionment with the New Left. Mythologisation of 9/11 predicated upon the Western belief in rationality is facilitated by the global disillusionment with the New Left. Interestingly, this provides an antithesis to Jürgen Habermas' and Jacques Derrida's debates on terror. The former's belief in Western modernity is rather eclipsed by the latter's more sophisticated discussion, whereas post-9/11 British fiction is marked by the revival of such beliefs in Western modernity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	200,000	60,000	260,000
２０１２年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：イギリス文学、テロ、暴力表象、多文化主義

１．研究開始当初の背景

本研究は英米では学術的基盤が確立しつつあるものだが、本邦のイギリス文学研究者の間では特に立ち遅れた分野である。

2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロ、および 2005 年 7 月 7 日のロンドン同時爆破テロは、イギリスのメディアに大きな影響を与えた。1968 年のイノック・パウエル議員の「血の河」演説の後遺症もあり、多文化主義に対する不満はこれまで公の場で明言され

ることは少なかったが、これが一気に噴出する。この前後から多文化主義に対する疑問や批判の声が上がり、7.7 以降には本格的な多文化主義政策批判が出版される。9.11 以降アジア系（インド亜大陸出身者）に対する襲撃・暴行事件が 4 倍にも膨れあがっているにもかかわらず、9.11 の世界貿易センター・ビル爆破の映像をトラウマ的であるとして規制を求める声が上がり、ある種の暴力表現に対する規制は強くなっている。

イギリスの小説家も、このような 9.11 以降の世界観の変化を言語化しようと努力している。2005 年 7 月 7 日がロンドンでのテロであるにもかかわらず、イギリスでも「9.11 以降」(post-9/11) という表現が「7.7 以降」（post-7/7）という言葉より多く用いられるのはこのためだろう。2005 年 9 月の「21 世紀文学」(ランカスター大学)、2008 年 9 月の「帝国以降の文学」（スターリング大学）などの国際学会にあるように、これまでにイギリスでも多くの英文学・英語圏文学や芸術学の学会で「9.11 以降」(post-9/11) というパネルが組まれている。また、アレックス・ハウエン『テロリズムと現代文学――ジョゼフ・コンラッドからキアラン・カーソンまで』（2002 年）やキャサリン・ペッソ＝ミケル他編『イスラム原理主義と文学』(2007 年）といった研究書でも 9.11 の表象は大きな問題として取り上げられている。

板倉は現代イギリス小説、とりわけゼイディ・スミスのような人種的マイノリティを出自とする若い作家を、多文化主義やその反動との関連性で読み解いてきたが、9.11 の問題にはたえず目配せしながらも、体系的な研究はできずにいた。先述の「帝国以降の文学」での学会発表でサルマン・ラシュディ『道化師シャリマー』(2005 年）を論じたのを除いて、「9.11 以降」という枠組みで文学作品を論じるには至っていない。また、英米の現代文化について共著書ではテロと多文化主義の問題も扱ってきたが、初学者向けの啓蒙書という性質上、扱えるのは『V フォー・ヴェンデッタ』のような映画作品のみで、そのうえあまり深く掘り下げる機会がなかった。

本研究を通じて、上述のような英米での先行研究を日本に紹介し、そのうえでハウエンがおこなったような過去の作品との比較を通じて発展させたいと考えるに至った。

２．研究の目的

本研究では、以下の作品を中心に、9.11 以降のイギリス小説に見られる新左翼や多文化主義への幻滅、社会の断片化、暴力表象の変化を跡づける。

- パット・バーカー『ダブル・ビジョン』（2003）
- イアン・マキューアン『土曜日』(2005)
- サルマン・ラシュディ『道化師シャリマー』（2005）
- ゼイディ・スミス『美について』(2005)

『ダブル・ビジョン』、『道化師シャリマー』、『土曜日』については、暴力表象の変化が 9.11 以降のどのような時代思潮の変化を反映しているのか探ってみる。力点はそれぞれの作品によって異なるが、『道化師シャリマー』のような作品では、この問題はアジア系（イスラム系）移民の表象の変化とも不可分ではない。『ダブル・ビジョン』や『土曜日』といった作品では、「狂気」や「理性」の定義とも無関係ではない。

一方で、『美について』やマーティン・エイミスとテリー・イーグルトンの論争については、研究目的が少し異なる。これらには、むしろ「1968 年世代以降」の文学や思想を特徴づける、新左翼的な価値観に対する愛憎半ばする態度が見られる。こういったイデオロギー的変化が前者のような芸術上の問題（暴力表象）とどのように関わっているかも明らかにしたい。

３．研究の方法

本研究では、「9.11 以降」のイギリス小説の特性を見つけるために、作品の精緻な読解に加えて、

(1) 9.11 以前のテロ小説や同一テーマの他国（あるいは他言語）文学作品との暴力表象の比較

(2) 新左翼的思想や多文化主義への幻滅を表す著述、映像テクストとの比較

をおこなう。このため、国内外の専門家との連携や意見交換をおこない（直近では 2010 年 9 月セント・アンドリューズ大学での研究発表が決定している)、大英図書館を中心にロンドンで資料収集をおこなう。また、時々刻々と変わる分野であるため、効率よく論文発表をおこなえるよう英文校閲などの協力体制を整える。

４．研究成果

(1) 研究の成果

9.11 以降のテロを扱ったイギリス小説において、2 つの傾向が見られることを明らかにした。西洋的理性や西洋的価値観を美化し、9.11 を西洋文明対反西洋文明という図式で捉え、神話化する傾向が見られた。このように暴力の表象を神話化し、様式化することに対する反発も見られたが、理不尽な暴力を目の前に作家はどのような表現を選択するべきかという問題を扱っていることに変わり

はない。一度批判すべき対象となったはずの西洋的価値観を神話化するようになったのには、新左翼的価値観に対する幻滅があったからだと推論づけた。これがユルゲン・ハーバーマスとジャック・デリダのテロ論と好対照をなしているのも興味深い。議論としては西洋的理性に対する信頼を示すハーバーマスより洗練された議論を展開するデリダに分があるように見えるが、9.11 以降のイギリス小説では西洋的近代への信頼へ回帰するような動きが見られたことも明らかになった。

9.11 の神話化は、どちらかといえば 1980 年代頃に進歩的知識人として知られていたベテラン作家によるものが多く、大きな影響力を持ったことも推察される。サルマン・ラシュディの『道化師シャリマー』やイアン・マキューアンの『土曜日』といった作品の歴史的な意義があるとすれば、これまで新しい視点を文学界に与え続けてきたふたりの作家が、オーソドックスな西洋的価値観を称揚し、西洋的理性と狂気の対立という単純化された図式で小説を書いたことかもしれない。これは、そもそも彼らが持っているある種の芸術的指向に起因するものでもある。ラシュディは複雑な現実をあえて単純化したり、幻想を加えたりすることでポストモダン的に表現することで有名であるし、マキューアンには狂気への興味と理性的な側面という相反する側面をもともと持っていた。これに先立ってパット・バーカーの『ダブル・ビジョン』のような作品が発表されていたのも興味深い。こういった暴力表象の神話化を初期の段階で批判したものだったからだ。

こういった傾向に、新左翼的な価値観への反発が拍車をかけていたように思われるのも興味深い。ゼイディ・スミスの『美について』やマーティン・エイミスとテリー・イーグルトンの論争には、もともとリベラル左派的価値観を持つ作家が 9.11 や「テロとの戦い」をめぐっては新左翼やリベラル左派の言動にむしろ失望していることが窺える。インタビュー等での発言ではリベラル的価値観への共鳴が見られるゼイディ・スミスは、『美について』で新左翼的な政治信条を持つ人物を主人公に据える。彼は共感を持って描かれているのだが、9.11 のポストモダン的解釈をさせた上で、その妻に「常識的」な反論をさせている。これは、彼の授業（美学史なのに政治的イデオロギーの話ばかり）とともに、彼の大きな欠点として描かれている。エイミスの場合は、もっと露骨である。「テロとの戦い」に対する賛意を表明した上で、パキスタン系イスラム教徒への差別的待遇を正当化するような「衝動」について語る。ここに左派のマルクス主義批評家テリー・イーグルトンが抗議をするのだが、イーグルトンがエイミスの父を持ち出して個人攻撃したこともあり、どちらかといえばエイミスが有利な状況で論争が収まった。新左翼的な価値観への幻滅はとても大きな潮流となっている。

(2) 成果の国内外における位置づけ

まだ充分ではないが、成果をある程度活字にした。国内での発表は少ないものの、海外ではある程度成果を公表できているので、今後はもっと浸透させていく努力をしたい。

『道化師シャリマー』論はイタリアの学術誌 *Illuminazioni* に投稿し、審査の末受理、掲載された。掲載は 2012 年。

『美について』について、「21 世紀ヨーロッパ文学」（2010 年 9 月、英国セント・アンドリューズ大学）で研究発表をした。現時点ではハリ・クンツルの作品と合わせたうえでの論文掲載を準備中である。

マキューアンの『土曜日』について、「恐怖、恐れ、テロ」（2011年9月、英国オックスフォード大学マンスフィールド・コレッジ）で研究発表した。この発表原稿に加筆・修正を施して同学会に提出し、再審査のうえ論文集*Fearful Symmetries*に収録されることとなった。出版は2012年。

バーカーの『ダブル・ビジョン』について、「恐怖、恐れ、テロ」（2012 年 9 月、英国オックスフォード大学マンスフィールド・コレッジ）で研究発表した。この発表原稿に加筆・修正を施して同学会に提出し、再審査のうえ論文集に収録されることとなった。出版予定は 2013 年。

エイミスの「失言」をめぐるエイミスとテリー・イーグルトンの論争についての論文を執筆し、『Albion』誌に掲載された。本誌は査読があるものの、この論文は依頼原稿である。

(3) 今後の展望

今後は以下の二点の活動をしていきたい。

まず、これまでの研究成果をもっと公表し、まとまったかたちにする。準備中の二つの論文を発表した上で、これらの研究をまとまったものにしたいと考えている。

次に、イギリスの小説のみならず、演劇、美術、テレビ番組、映画なども研究対象とし、9.11 同時多発テロ以降の暴力表象の変化をより多面的に、広い視野から捉えてみたい。既にエイミスとイーグルトンの論争を研究する際にテレビ番組も参照したが、現代では「文学」だけを切り離して考えることはできなくなっている。エドワード・ケンプの戯曲『5.11』テレビドラマ『ブリット』など、「問題作」は枚挙にいとまがなく、今後はこういった作品にも対象を広げていきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）
(1) 板倉厳一郎、「.現代英文学のある傾向――マーティン・エイミスの発言をめぐって」、『Albion』、査読無、Vol. 58、2012 年、pp. 62-73

(2) Gen’ichiro Itakura, “I have become death”: Shalimar the Clown and the Post-9/11 Anglo-American Sensibilities”, *Illuminazioni*, 査読有, Vol. 19, 2012 年, pp. 32-69.

〔学会発表〕（計　3 件）
(1) Gen’ichiro Itakura, “Representing the Pain of Others: Pat Barker’s *Double Vision*”, Fear, Horror and Terror 6, 2012 年 9 月 8 日、英国オックスフォード大学マンスフィールド・コレッジ

(2) Gen’ichiro Itakura, “Writing Terror Within: The Role of Science in *The Secret Agent* and *Saturday*”, Fear, Horror and Terror 5, 2011 年 9 月 8 日、英国オックスフォード大学マンスフィールド・コレッジ

(3) Gen’ichiro Itakura, “An Angry Middle-Aged Man’s ‘Resistance through Rituals’: Zadie Amith’s *On Beauty* and the End of Postmodernism”, 21st Century European Literature: Mapping New Trends, 2010 年 9 月 15 日、英国セント・アンドリューズ大学

〔図書〕（計　2 件）
(1) Catalin Ghita, Joseph H. Campos, Gen’ichiro Itakura, et. al., Inter-Disciplinary Press, *Fear, Horror, Terror*（仮題）, 2013 年出版予定

(2) Riley Olstead, Katherine Bischoping, Gen’ichiro Itakura, et. al., Inter-Disciplinary Press, *Fearful Symmetries*, 2012 年, 170 pages (pp. 23-32).

６．研究組織
(1)研究代表者
板倉　厳一郎（ITAKURA GEN’ICHIRO）
中京大学・国際教養学部・准教授
研究者番号：20340177

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし